

古代エジプト人と神々

内田 杉彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

Ancient Egyptians and the Gods

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプト人はナイル流域を神々が創造した「世界」とみなし、その防衛を主目的とする宗教を作り上げた。この宗教は神々のための「公的祭祀」を中心としていたが、さまざまな神概念や神話が共存する柔軟で多様な性格を持ち、そのなかでは「私的信仰」も大きな位置を占めていた。

キーワード： 古代エジプト, 宗教, 王権, 来世

Keywords: Ancient Egypt, Religion, Kingship, Afterlife

1. はじめに

古代人は、自然界を神秘的な「力」が支配する領域とみなし、そのような「力」を「神々」として崇めていた。古代エジプトは、このような人間と神々の関係を最もよく示す古代文明のひとつであった。神々をまつる神殿が不滅の価値を持つ建造物として石材で作られ、その建設や増改築が国家的な建築事業となっていたことは、当時の社会における神々の重要性を物語っ

ている。古代エジプト人にとって、彼らの神々とはどのような存在だったのだろうか？他の古代社会と同じくエジプトにおいても、神々の概念を生み、その性格を決定したのは自然環境であり、神々について語るにはまず、風土に目を向ける必要があると言える。

2. 古代エジプト人の「世界」と神々

ほとんどが砂漠の北アフリカにあって、大河ナイルに沿って緑豊かな平野が伸びるエジプトの風土は特異なものである。とりわけ古代エジプト文明の揺籃の地となったアスワン以北のナイル流域は、広大な砂漠の只中にありながら、それとは対照的な生命と自然の恵みにあふれる「オアシス」をなしている。

かくも恵まれた国が不毛の大地のなかに存在し、自

先王朝時代 (紀元前5500~3000年)
王朝時代 (紀元前3000~332年)
初期王朝時代 (前3000~2686年)
古王国時代 (前2686~2181年)
第一中間期 (前2181~2025年)
中王国時代 (前2025~1795年)
第二中間期 (前1795~1550年)
新王国時代 (前1550~1069年)
第三中間期 (前1069~715年)
末期王朝時代 (前715~332年)
ギリシア・ローマ支配時代 (前332~紀元後395年)

表1. 古代エジプト年表



図1. エジプト略図

分たちがそこに生をうけたという事実は、古代エジプト人の世界観に大きな影響を及ぼすこととなった。彼らはこの国が、自分たちの住む「世界」として特別に作られ、一定の「秩序」によって守られていると感じるようになるのである。この「世界秩序」(マアト)の存在を何よりも強く確信させたものは、毎年、定期的に起こったナイルの氾濫現象であろう。9月から10月まで流域平野全体を水没させ、農耕に適した肥沃な泥と豊富な水分をもたらす氾濫は、古代エジプト人の「世界」をいわば年ごとに再生させたと言える。しかもそれは農耕に最適なタイミングで起こった。エジプトでは冬に播種、夏に収穫を行う麦が主作物であり、氾濫が終わるとともに種をまき、次の氾濫が起きる直前に収穫を済ませることができたのである。

古代エジプト人にとって自分たちの生活にこれほどの恩恵をもたらす「世界」は、神々が創造したものしか考えられず、自然界は神々やその力の顕現として意識された。彼らのこうした世界観は古代エジプトの「創世説話」(「神学」)に示されているが、そのなかでも中心をなしていたのは、太陽信仰の聖地ヘリオポリスに起源を持つとされる「ヘリオポリス神学」である。²⁾ この「神学」は、ヘリオポリスの神アトウムを創造神あるいは世界の根源神とし、この神が世界の構成要素となる神々を生んで自らは太陽神となり、その神々がさらに子孫の神々を生むというプロセスにより「世界」が作られるという考え方、すなわち「創世」を「分裂・生殖」とみる概念を示している。

それによると創世以前には、暗闇に閉ざされた「原初の海」(ヌン)が果てしなく広がっていた。ヌンは「混沌」の領域ではあったが、「創世」をうながすエネルギーをも秘めており、その助けによって創造神アトウムが出現し、男神のシュウ(大気)と女神テフヌト(湿気)を生む。シュウ(大気)の出現は、ヌンの水中に「空間」と最初の陸地である「原初の丘」を生じさせた。太陽(太陽神ラー)となったアトウムは、甲虫(スカラベ)の姿のケプリ神となって日輪を押し上げ、この神の放つ光が大気(シュウ)を満たして原初の闇を払い、最初の「日の出」が実現したとされる。湿気の女神テフヌトはやはり女神とされるマアト(世界秩序)と同一視されており、ヌン(「混沌」)とは対照的な「世界」の出現が明らかにされている。

このテフヌト(マアト)とシュウの変わりからは男神ゲブ(大地)と女神ヌト(天空)が生まれ、それによって「世界」とそれを取り巻くヌンとの「境界」が作られて「世界」の基本的な環境が整う。ケプリとして生まれた太陽神(ラー)は天空(ヌト)に昇って、日輪を戴くハヤブサの姿のラー=ホルアクティ神となり、強い光と熱を大地(ゲブ)へと降り注ぐ。しかしラー=ホルアクティはやがて地上へと降下し、再びアトウムとなって地平線の下に沈むのである。姿を変え

つつ行われるこの太陽神の旅は以後も永遠に繰り返され、こうして悠久の「時」の流れが生じるが、それはヌンからの太陽神の出現(創世)が繰り返されることも意味していた。ナイルの氾濫と同じく太陽神も世界を「再生」させると信じられていたのである。

当時の宗教文書には、こうして整った「世界」の姿が描かれているが、そこでは横たわる男性の姿をとるゲブ(大地)と、その上に覆いかぶさる女性の姿のヌト(天空)、ヌトを支える男性の姿のシュウ(大気)が表されている。雌牛の姿をとることもあるヌトの身体の上には、太陽神の乗る「太陽舟」がしばしば描かれる。ナイルの水と同じ青色を示すヌトの身体(天空)はヌンの水面でもあり、そこを旅する太陽神にも舟が必要とされていたのだろう。ゲブの下には「来世」(冥界)があって、太陽神は夜にこの冥界を旅するとされていたが、それに対して「来世」は天空(ヌトの体内)にあり、太陽神は夕方になるとヌトに呑み込まれ、翌朝に産み落とされるとも信じられていた。

ゲブとヌトの変わりからは、オシリス(王権、生命)と妻のイシス(玉座)、セト(死)とその妻のネフティスが生まれる。これらの神々の誕生は古代エジプト人の生活や社会の基本をなす「生命」と「死」、「王権」の創造を意味している。これで「世界」の中心的な要素が揃い、アトウムからこの世代までの神々は「ヘリオポリス九柱神」として一括表現される。

この「九柱神」の最後の世代はいわゆる「オシリス神話」の神々でもある。この神話によれば、オシリスは王として「世界」(エジプト)を支配していたが、弟のセト(死)によって殺害される。これは「死」が「世界」の一部であり、「生命」が「死」の定めをまねがれないことを示している。³⁾ しかし一度は「死」に屈したオシリス(生命)は「来世」に復活を遂げ、オシリスとイシスの間には息子のホルスが生まれる。オシリスは冥界の王となり、成長したホルスは仇のセトに勝って地上の王権を継承するのである。

オシリスが王として来世に復活し、地上の王権は正当な後継者ホルスが受け継ぐとするこの神話は、「生命」と「王権」の不滅という古代エジプトの中心的な思想を象徴している。^{3) 4)} 「生命」は「死」を通過点として死後の「再生」へと結びつき、現世においても新たな「生命」(ホルス)が生まれる。そしてオシリスの「王権」もまた、「死」によって失われることなくホルスに継承され、オシリスは来世の「王権」を獲得するのである。ホルスは天空と王権の神でアトウムとは別系統の太陽神でもあり、王はホルスの化身とされていた。復活・再生の神オシリスとこのホルスの信仰が神話として結びつけられた背景には、王権が王個人の死に関わらず永遠に継承されることを示し、王権を強化する狙いがあったものとみられる。⁴⁾ つまり王は死ぬと来世の王オシリスとなり、新たな王がホルスとして現世の

玉座につくことで王権が継承されるのである。

「ヘリオポリス九柱神」の誕生はおそらく「世界」全体の創造を象徴するものであろう。²⁾これは「九柱神」の「九」という数からもうかがえる。古代エジプト語の「三」は「複数」を意味する記号でもあり、それゆえ「三の三倍」である「九」は「複数の複数」(莫大な数)をも表していたと考えられる。「九柱神」とは実際には「数多くの神々」、おそらくは「世界」を構成するすべての神々を指しており、「ヘリオポリス九柱神」はその代表者とみることができるのである。古代エジプト人の「世界」を形作っていたこれら「数多くの」神々は、人間や動物の姿、数種類の動物を合成した姿など、さまざまな形で当時の彫刻や絵画に表現されているが、これらの姿は神々の能力や性格の一端を示す「象徴」あるいは「記号」だったとみられる。³⁾神々が人間の姿をとる場合、それぞれの神の身元を示す象徴を頭上にのせるのが普通だが、これは神々の姿の「記号」としての性格を物語っている。動物、あるいはその頭部を持つ人間というエジプトの神々に特有の姿も、動物の能力や生態が自然界を支配する神々の力のあらわれとされ、そのような動物が神々の「象徴」とされたことを示している。神々のなかには太陽神のように何通りもの姿を持つものが少なくないが、これはその神がそれだけ多様な側面を持つことを意味しており、「世界」を構成し支配する神々の力の強大さと神秘的な性格を示すものと言える。

このような神々⁴⁾のうち主流をなしていたのは創造神と「世界」、とりわけ自然界の主な構成要素となった神々である。そのなかには同じ領域に関わりを持つ複数の神々や、いくつもの性格をあわせ持つ神々が含まれ、異なる神々が各自の個性を保ちつつ合体する「習合」という現象も見られる。これらの特徴は、エジプトの宗教がさまざまな神話をとりこんで発展しながらも、それらをひとつの大系にまとめることなく、むしろ互いに補い合うものとして共存させていたことのあらわれである。これは神々の示す多様な姿とともに、古代エジプト人が「世界」をさまざまな側面から多角的に捉えていたことを示すものと言えるだろう。また、自然界の神々のなかには、芸術や文字など社会や文化の各側面に関わりを持つものも数多く見られる。人間社会と自然界は同じ「世界秩序」の一環としてわちがたく結びついていたのである。

創造神⁵⁾とされた神々は、アトゥムのほか、メンフィスのプタハ、エレファンティネで崇拝されたクヌムなどが知られている。「ヘリオポリス神学」が「創世」のプロセスを神々の「生殖行為」としたのに対し、そのような行為が「認識」され「言葉」に表現されたことを「創世」の原動力とみなす見方も古くからあった。プタハはこのような「創世」の知的原理を表わしており、創造すべきものを考え、その名を口に出して創世を行っ

た神とされる。プタハは美術・工芸の神でもあり、職人が作品を構想してから現実に製作するのと同じように「世界」を創造したとされたのであろう。²⁾「世界」を創造神の「作品」とする概念は、陶芸職人として轆轤の上で「世界」を作ったとされるクヌムにもあてはまる。このような何通りもの「創世」の概念は、おそらく「創世」の神秘的な性格を暗示する「象徴」として共存していたのであろう。

「大気」の神はシュウ以外に見られないが、「風」は神の息吹とされており、テーベの神アムンは風神としても知られていた。これに対して「水」が神とされることはなく、「湿気」の女神テフヌトもあまり広く崇拝されることはなかった。「世界」に存在する水はその周囲を取り巻くヌンに由来するとされていたのである。ヌンは「創世」を可能にしたエネルギーを保持しており、国土に豊かな実りをもたらすナイルもヌンに源を持つとされたが、その水をエジプトの国土に行き渡らせる氾濫現象はハピ神として崇拝されていた。ナイルや水に関わりを持つ神々としてはさらに、鱈の神ソベクやカエルの女神ヘケトなどが挙げられる。

「天空」と「大地」は人間の生活と密接に関わるため、これらに結びついた神々は比較的多く見られる。「天空」はハヤブサの姿のホルス神とされたほか、雌牛の姿をとる女神としても思い描かれていた。「九柱神」のヌトとともにこのような女神を代表していたのがハトホルである。「ホルスの館」を意味するこの女神の名前は、ホルスを庇護する天空神ハトホルの性格を示しているが、王がホルスの化身とされたため、ハトホルは必然的に王の母、王権の守護神ともみなされた。ハトホルはさらに愛と音楽の女神として広く信仰を集めただけでなく、砂漠の墓地を守る女神、異国の富をエジプトにもたらす女神としても崇拝された。天体の神としては太陽神が最も重要だったが、夜空の天体が示す規則的な動きも「世界秩序」の顕現とされ、そのいくつかに神格が与えられた。「月」はコンス神、あるいはトキヤヒヒの姿をとるトト神とされ、トトは文字と知恵の神としても広く崇拝された。星や星座の神も知られており、ナイル氾濫の直前に東の空に出現するシリウス星は、氾濫の先触れをなす女神ソティスとして崇められた。

「大地」の神々は一般には男神であり、「九柱神」のゲブ以外にも、ナイルの氾濫によって生じた豊かな国土を表わすタァチェネン、「冥界」そのものを表わすアケルなどが挙げられる。さらに「大地」の恵みを表わす神々としてオシリスのほか、穀物神ネベル、コブラの姿の「豊饒」の女神レネヌト、「樹木」の女神などが知られていた。

ナイル流域の東西に広がる「砂漠」は、それ自体が神とされることはなく、砂漠の持つさまざまな側面が神々とされた。砂漠は「九柱神」のセトが支配する

「死」と「不毛」の領域であったが、一方、オアシスが点在し、石材や鉱物などの資源が得られるところでもあり、そのような砂漠の恵みをつかさどる神々も崇拝されていた。豊饒の神であり金鉱山の守護神でもあったミンは、その代表と言える。砂漠はまた墓地が設けられたところでもあり、その守護神としてハトホルのような女神のほか、ジャッカルや山犬の姿の神々も崇拝されていた。ミイラ作りの神・死者の守護神とされたアヌビスは後者の神々を代表する存在であり、古王国後期に復活・再生の神オシリスが台頭するまでは、冥界の支配者として最も有力な神であった。

「来世」に関わる神々は、このような墓地の神々やオシリス以外にも数多く、死後の再生・復活によせる古代エジプト人の切なる願いがうかがえる。オシリスが冥界に君臨する王とされたのに対し、太陽神ラーは冥界で死者たちを目覚めさせ、彼らが永遠の時の流れのなかで生きるのを可能にする神とされていた。³⁾ 遺体の保存（ミイラ作り）は死後の復活のための前提条件であったが、それに関わる神々としてはアヌビスのほか、ミイラの内臓を守る「ホルスの四柱の息子」や、彼らを守護する四柱の女神が知られている。また、再生・復活の最後の関門とされた「死者の審判」にはオシリスのほか、死者の「心臓の計量」を行うアヌビス、その結果を記録するトトなど多くの神々関わっていた。

3. 「公的祭祀」と「私的信仰」

このように多くの神々が存在し、「秩序」によって守られているはずの「世界」には、現実にはさまざまな災難や不幸が存在する。古代エジプト人はこのような「災い」をも「世界秩序」の一部として認めざるをえず、「災い」を象徴する神々や魔物が存在した。たとえばセトは、自然災害や人間同士の不和など「世界秩序の乱れ」をつかさどるとされ、疫病など諸々の病気はセクト女神やその配下の魔物の仕業とされた。^{8) 9)} また、恵みをもたらすとされた神々も気まぐれな一面を持ち、水害や飢饉、王権の衰えや異民族の侵入、それらによる社会の混乱などは、こうした神々が人間に背を向けた結果と信じられていた。

しかし何よりも重大な脅威となっていたのはヌンであった。⁵⁾ ヌンは「世界」の創造を助けて太陽神の永遠の旅を可能にし、生命を育む水を供給する存在だったが、その一方で「世界」を呑み込もうとする「混沌」でもあり、冥界を旅する「太陽舟」を大蛇アペビの姿となって襲うとされていた。もしこの「太陽舟」がアペビに呑み込まれれば、「世界」は再び原初の「混沌」に戻ると信じられていたのである。

「世界秩序」がヌンの脅威から守られ、維持されるかどうかは、「世界」を構成する神々の力と善意にかかっていたと言える。それゆえ古代エジプトの宗教は神々の活力を維持し、彼らとの関係を良好に保つこと

で「世界秩序」を守るのを主目的とし、そのために神々をまつる「祭祀」（「公的祭祀」）を中心としたものとなった。セトやセクトのような「災い」の神も「祭祀」によってなだめることでその被害を最小限にとどめ、「世界」防衛のために利用できると考えられていたのである。エジプト各地の共同体では早くからさまざまな神々が守護神としてまつられていたが、それはこの「公的祭祀」の先駆けと言える。統一王朝の成立とともにそのような神々は王国各地のノモス（州）やその内部の共同体の主神（「地方神」）となった。地方神はそれぞれ天空や来世などの専門分野を持つ一方でエジプト各地をその守備範囲としたわけであり「世界」をいわば分担して守っていたと言える。これに対して「世界」全体を守るとされたのが「国家神」であり、最も有力な創造神である太陽神はほとんど常に国家神とされた。また、王家の出身地の地方神もしばしば国家神とされたが、中王国および新王国時代の国家神で、太陽神ラーと「習合」してアムン＝ラーとなったテーベの神アムンは、そのような神の典型と言える。

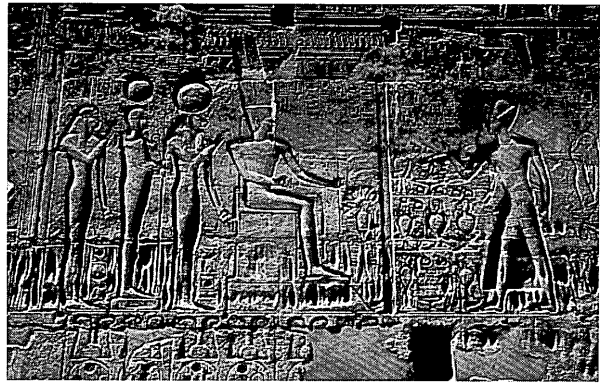


図2. 神々と王：新王国時代の神殿浮彫より

これら地方神や国家神のための神殿造営と祭祀は「世界秩序」の維持のために行われる「神々への奉仕」であり、国家の支配者である王（ファラオ）の義務であった。⁴⁾ 王は天空神ホルスの化身、太陽神ラーの息子とされ絶大な権力を持っていたが、これもひとつには王がそのような義務を果たし、神々と人間との「仲介者」となることを期待されていたからである。王は国内の社会秩序を維持し、国土を外敵から守る統治者だっただけでなく、「世界秩序」を維持するために神々をまつる神官でもあったのである。とはいえ王ただ1人がすべての神殿で祭祀を行うのは不可能で、実際には各神殿の神官たちが祭祀のほとんどを代行していたが、王だけが祭祀を行うという建て前は守られており、神殿の壁面浮彫に見られる祭祀場面に、供物を捧げ、香を焚く姿で登場するのは常に王である。

この「公的祭祀」の場となった神殿¹⁰⁾は、特に新王国時代以降の神殿の場合、全体が長方形の壁に囲まれており、塔門と露天の中庭に続いて、屋根に覆われた



図3. テーベ（現在のルクソール）に造営されたカルナク神殿（アムン大神殿）

区画が設けられている。この屋根を持つ区画には石柱が林立する多柱室と、神像を安置する祠が置かれ神殿全体の核をなす至聖所があった。神像は神が宿る「肉体」であり、この神像のために毎日行われた「祭儀」¹⁰が「公的祭祀」の基本をなしていたと言える。この日々の祭儀は1日2回、神像を祠から出し、洗い清めて化粧を施し、衣服と装身具で覆って香を焚き、食事を供えるという行為を中心としており、神はこのような「奉仕」を受けるかわりに神殿に住み、「世界秩序」の維持に貢献してくれると信じられていたのである。この祭儀は、王や一部の神官が共同体全体のために行なうもので一般に公開されたわけではなく、人々の個人的な祈願や救済を対象としたものでもなかった。

しかし神殿は、一般の人々の「私的信仰」¹¹の場ともなっていた。人々は神殿の前庭か外側で礼拝をし、捧げ物することを許されていたのである。神殿の外壁にはさまざまな神々の姿が刻まれていたが、そのなかには神殿の主神との「仲介役」として信仰をあつめたものもあり、至聖所の裏手に一般人用の礼拝所が作られることもあった。人々の捧げた奉納品のなかには、礼拝場面を表す奉献碑や神の小像、後には神を象徴する動物のミイラまで含まれていたが、これらはいずれも神との個人的な絆を確保するためのものだったと言える。奉献碑に刻まれた碑文のなかには、神に対し罪を

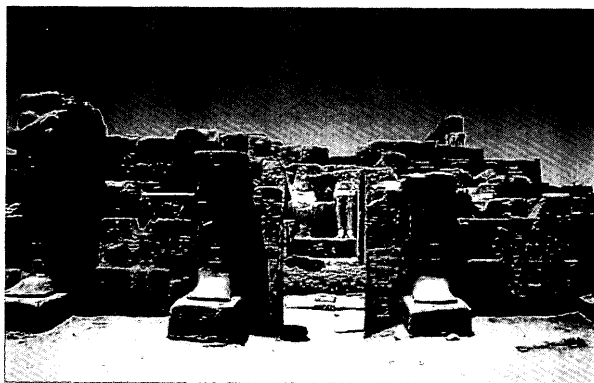


図4. カルナク神殿に設けられた一般人用の礼拝所：新王国時代

犯したことを認めて神の慈悲を請うものも見られ、当時の人々の敬虔な信仰心がうかがえる。

また「公的祭祀」のなかでも、特定の祭日に行われた「祭礼」¹⁰は多くが一般公開されており、ふだんは神殿の奥深くに安置されている神像が舟形の神輿（「聖舟」）にのせられて練り歩いた。神像は神輿の上の小さな祠に納められていてじかに見ることはできなかったとはいえ、祭礼は、一般人が神々に接する貴重な出会いの機会だったのである。祭礼はまた、神が人々の問いかけに答えて「神託」¹²をくだす場でもあった。「神託」に寄せられた問いかけは、日常の人間関係や取引、裁判や訴訟に関するものなど多岐にわたり、神殿にまつられていた神々が一般人の生活に密接な関わりを持っていたことを物語っている。

しかし古代エジプト人と神々の交流の場は必ずしも神殿だけではなく、妊産婦の守護女神トエリスや、夫婦和合など家庭生活全般の守護神ベスのように「家」や「家族」を守る神として各家庭で崇拝された神々が存在した。「公的祭祀」の対象となった神々のなかにもそのような役割を引き受けるものがあり、たとえばホルスは蛇やサソリの害を防ぐ神、「豊饒」の女神レネステトは子供の成長をつかさどる女神とされた。また、それぞれの「専門分野」に関わる職業の守護神となった神々も数多く、たとえば文字の神トトは書記、工芸の神プタハは職人をそれぞれ守る神となった。

4. おわりに

古代エジプト人は、自分たちの国を「混沌」に囲まれ脅かされている「世界」とみなし、その防衛を主目的とする宗教を発展させた。このような世界観から生まれた宗教は、ややもすれば排他的・一元的なものとなりかねないように思える。ところが彼らが実際に作り出した宗教には、さまざまな神々や神話、信仰のあり方が共存していた。周辺地域との交流が進むにつれて、エジプトの「万神殿」には異国の神々も仲間入りするが、これはエジプト宗教の持つそのような多様性・柔軟性によるものと言える。

周囲から孤立したひとつの「世界」という点で、古代エジプト人の「世界」は現代世界の縮図とも言える。彼らがナイル流域という「オアシス」に生きていたように、我々もまた、地球という「オアシス」に生きている。異なる宗教や文化の間で衝突や軋轢が絶えず、寛容の精神が求められる現代において、多様な概念・価値観を共存させていた古代エジプトの宗教思想は大きな意義を持つように思えるのである。

文 献

- 1) Morenz, S. : Egyptian Religion. Cornell University Press, Ithaca and New York, 1973.
- 2) Allen, J.P. : Genesis in Egypt : The Philosophy of Ancient Egyptian Creation Accounts. Yale University, New Haven, 1988.
- 3) 内田杉彦 : 古代エジプトの「死後の世界」. 明倫齒誌, **5** (1) : 58-63, 2002.
- 4) 内田杉彦 : ピラミッドと王権. 明倫齒誌, **6** (1) : 55-61, 2003.
- 5) Hornung, E. : Conceptions of God in Ancient Egypt : The One and the Many. Cornell University Press, Ithaca and New York, 1982.
- 6) Silverman, D.P. : Divinity and Deities in Ancient Egypt. Shafer, B.E. (ed.) : Religion in Ancient Egypt. 7-87, Routledge, London, 1991.
- 7) Wilkinson, R.H. : The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt. Thames and Hudson, London, 2003.
- 8) Te Velde, H. : Seth, God of Confusion: A Study of His Role in Egyptian Mythology and Religion. E.J.Brill, Leiden, 1977.
- 9) 内田杉彦 : 古代エジプト人と病気. 明倫齒誌, **3** (1) : 60-66, 2000.
- 10) ウィルキンソン,リチャード・H. (内田杉彦訳) : 古代エジプト神殿大百科. 東洋書林, 東京, 2002.
- 11) Baines, J. : Society, Morality, and Religious Practice. Shafer, B.E. (ed.) : Religion in Ancient Egypt. 123-200, Routledge, London, 1991.
- 12) Cerny, J. : Egyptian Oracles. Parker, R.A. : A Saite Oracle Papyrus from Thebes in the Brooklyn Museum (Papyrus Brooklyn 47.218.3) , Brown University Press, Providence, 1962.